



エンジェル・フォール! 4

α L P H α L I G H T

五月蓬

Gogatsu Yomogi



アルファライト文庫 

主な登場人物

ダディ

“ゴッドファーザー”の異名を持つ元天使。ムキムキの巨漢で外見はヤクザそのもの。

ヨシエ

スーパー“掃除人”と呼ばれる元天使。ダディの妹だが、兄妹の仲はよくない。

ミュゲ

てんしらんまん 天真爛漫な少女。10歳。自立起動型魔具とらちゃんは相棒。

才羽 清

サイ バ イツキ ノトス国最強の剣士。21歳。救世の妹。女だが男っぽい外見を気にしている。

杏樹 明華

あんじゅあきか 薄葉の妹で才色兼備の優等生。17歳。異世界で覚えた超強力な魔法を操る。

ハラ

中二的な言動、服装で相手を惑わす堕天使。武器は数々のマジックアクセサリ。

杏樹 薄葉

アン ジュウ ス ハ 超平凡・特徴なしの高校生。18歳。摩訶不思議な「暗中無心拳」の使い手。

才羽 救世

さいばぐせ 治療術を操る綺麗な“男の娘”。22歳。反乱の罪を償うため慈善活動中。



杏樹薄葉
アンジュエウスハ

踊り騒ぐが信条の、娯楽溢れる大国ヴォラス。

陽気な国の中心、首都ヤドハクには黒い髪が住まう。

杏樹薄葉、明華の兄妹をはじめとする六人の天使達は、そんなヴォラスへの入国を前にして、とある問題に直面していた。

「そろそろ国境ですよ。これから入国審査があるので……あ」

巨大な馬型テラス、ベゲモートの上で手綱を握る才羽救世がはっとした。

「どうしたんですか救世さん？ 何か問題でも……あ」

救世の様子を気に掛けた明華もふと気付く。二人の視線がくると、見るからに中二病な男と幼女に向けられる。

「……身分を証明できるもの、持ってます?」

突然の質問を受けた新しい仲間——紗羅葉兄妹、ハランとミュゲ。まずはミュゲが元氣よく答えた。

「持つてるよ! セルセラ・コミュニティの人がお誘いに来た時に、私の分ももらったつて、アヤメお姉ちゃんが言ってたー! それでね、お出かけするなら持つてきなさいつて!」腕に抱くバッグに手を突っ込んで、ミュゲは一枚のメンバーズカードを取り出す。これで国境を越える際の諸々の問題が解決できるのは、薄葉達も体験済みである。

「へえ、ミュゲもカード持つてんのかー。つてか、あの人抜かりないな……マジでミュゲも引き込んだのか」

薄葉が感心したような、呆れたような、何とも言えない複雑な表情をする。思い浮かべているのはもちろん、白い仮面を付けたコミュニティ窓口の奇人、ジアミンである。

あの人苦手なんだよな……と思いつつ、自身のカードを取り出す薄葉に、ミュゲがぎゅつと抱きついた。

「ウスハとおそろい!」

「おお、お揃いだな」

メンバーズカードを見比べながら、至極普通に、子供に接するような態度の薄葉。しか

しながら、それを微笑ましく眺められない男がいた。

「おい、貴様あ! ミュゲに手を出したら容赦せんぞ! なあにがお揃いだア!? 俺は絶対に結婚なんぞ許さん! このロリコンがあ!」

お兄ちゃんハハちゃんは激怒した。ちなみに、合流してからずつとこの調子である。

当然薄葉も黙っていない。

「俺はロリコンじゃねえつての! あんた、ずつとしつこいぞ!? なんで初対面なのに敵意むき出しにされにゃあかんのだ!」

「ああん!? 自分の胸に聞いてみる!」

先程から続く喧嘩にさすがに嫌気がさしたようで、普段は優しい表情の救世も、若干黒い影を落とした笑顔で、手をばんばんと叩いた。

「はいはい。喧嘩はダメですよ! それよりハランさん、身分証明になるものは?」

「何度も言わせるな! バランじゃない。ハランだッ!」

「いいから、ほら」

ハランへの接し方が尋常でなく雑な救世。ここまであからさまに悪意を見せるのは珍しいのだが、こちらもずつとこの調子である。険悪な男性陣に、救世の妹、済はハラハラしていた。

不満そうなハランだったが、しばらく黙りこくった後、次第に顔色を悪くする。

まさかの事態である。ハランは身分を証明できるものを持っていなかった。

彼はコミュニティから勧誘されたこともなく、そもそもこの世界に来てから、大半の時間を塔での引き籠もり生活に費やしていたため、世間の常識など全くない。故に、身分証明が国境で必要だなんて知る由もなかった。

何だかんだ勢いで生きる男、ハランのノープランっぷりが、ここに来て露わになった。

「どうやらハランさんとはここでお別れようですね……」

緩む口元を手で覆い、どう見ても嬉しそうな救世が顔を背けた。

「俺はバランだ！ いや、ハランであつた！ ……じゃなくて、ちょっと待てッ！ 喜んでるなお前！」

かなり格好つけて、自分を愛してくれていた女の元を去ったのに、「国境で止められちゃった、てへぺろ♪」なんて言つて帰るとか、惨めにもほどがある。

アヤメの豚を見るような冷めた表情が、ハランの目に浮かぶ。

「どうしてミュゲちゃんは準備してきたのに、ハランさんはそんなんですか！」

明華に真面目に怒られて、ぐぬぬ……と唇をかむハラン。そんなハランに、済が気まずそうに声を掛けた。

「ま、まあ、お前も長年大変だっただろうからな。ずっと塔に籠もつてたんじゃあ、そういうこと知らなくても仕方ないさ……な？」

「ぐうっ……！ そ、そんな、俺を引き籠もりの世間知らずみたい……！」

「わ、悪い！ そういうつもりでは……！」

済のフォローになつていないフォローに、膝を抱え落ち込むハラン。

「お兄ちゃんを置いてかないで！ かわいそうだよ！」

そう必死に懇願するミュゲの姿は、拾ってきた犬を捨ててきなさいと言われた子供のようである。しかし、当のお兄ちゃんはまだただただ感激していた。

ミュゲの悲しげな目に、うーん、と困った様子の救世。こちらもまるで、犬を飼いたいと子供に泣きつかれたお母さんのようである。

「ミュゲさんにそう言われたら……置いてく訳にもいかないですね」

「ミュゲが言わなきゃ置いてく気満々だったのか!？」

「はい」

「!？」

救世が笑顔で吐く毒に、ハランはぶるると身を震わせた。

無言で対峙する救世とハランの間に、済が気まずそうに割つて入る。

「……で、どうするんだ？ 強行突破って訳にもいかないし……一度どこかの街まで戻って、コミュニティに申請をしてくれるのいいかな？」

「そうですね。面倒ですけど仕方ないですよね。明華さんもそんな感じでよろしいでしょうか？」

ハランへの嫌味を含ませつつ、明華のほうを向き、救世は尋ねた。

薄葉はあまり旅の方針に興味がないので、最終的な決定権は、だいたい明華に委ねられることになる。

いつもならばと決まるのだが、今日は少し違った。

「え？ あ、はい」

びくつと肩を弾ませる明華。少し気が抜けていたらしい。

らしくない反応に、薄葉は怪訝な表情になる。

「……大丈夫か明華？もしかしてまだ調子が悪かったりするのかな？」

「え、いえ大丈夫！ 別に何でも……」

明華は焦ったように作り笑顔を見せて、首を横に振った。しかし、その様子はどう見てもおかしかった。

微妙な空気のなか、一行はとりあえず、コミュニティのある近場の街まで戻ること

めた。しかし、そこで突然、背後から意外な声が降りかかる。

「あらら〜。黒い髪がいつぱい……と思つたら、あの時の天使さんじゃないですか〜？」
のんびりと間延びした声――。

「シエーナ……？」

一度だけ交戦したことのある救世と済が、眉をひそめてその女の名前をつぶやいた。

ズイスイにて禁断の魔導を研究し、反乱を目論んでいた宗教組織、オラクル。巨大絵筆を担ぐでか帽子の『自称天才』の召喚術士シエーナも、その組織の仲間だった。

大きなダチョウのような鳥にまたがり、彼女は後ろから近づいてくる。

「どうしてここに……!？」

「怖い顔で睨まないでくださいよ〜！ オラクルとの契約はもう切れてるんですから〜。今は故郷に帰ってきたただけです〜。敵対するつもりなんてさらさらないですから〜」

くすくす笑いながら、シエーナは気安く手を振った。

「それで〜〜なにかお困りのようでしたから〜〜声を掛けたんですけどね〜〜？」

「お前でも人を心配するのか？」

済の嫌味を気にも留めず、シエーナはにやりと笑う。

「いえいえ〜。そりゃあ、伝承の天使様でもなければ心配なんてしませんよ〜？ 他人に興味ないですしね〜？」

シエーナの人間性が表れた言葉に、済は呆れながらも納得させられた。手のひらをくるっと翻して上に向け、シエーナは続ける。

「逆を言えば〜天使様がお困りなら、少しくらい手を貸してもいいですよ〜ってことなんですけど〜？」

それは意外な言葉だった。彼女の言動を知っていれば、「手を貸す」などという発想が出てくるとは思えないからだ。

じろりとシエーナを睨み、済が刀に手をかける。

「見返りでも求めるのか？」

「いえ〜。恩売つとくだけでも儲けじゃないですかあ〜？」

今度は巨大な筆を片手で揺らして、シエーナが楽しげに笑った。そして、筆先をぐいとハランに向ける。

「要はこの冴えない天使さんを〜ヴォラス内に連れ込みたい訳ですよ〜？」

「冴えない……!？」

ハランをしつかり貶しつつ、現在の状況を的確にシエーナは言い当てる。

救世は笑顔で即答した。

「そうです」

ハランが首を傾げて口を挟む。

「……お前、それ、こいつの状況判断を肯定してるんだよな？」

「冴えない、の部分もです」

「なんだと!？」

そんな二人のやり取りを無視し、シエーナはまさかの提案を持ち掛ける。

「ん〜すぐにでも通れる方法、私ならあるんですけど〜？」

胡散くさいその誘いに、全員が顔をしかめた。

絶対に裏がある——一番鈍い薄葉でさえもそう思った。

顔を見合わせ返答に困る一行だったが、そこで幼い少女の声が上がった。

「お願いします！ お兄ちゃんと一緒に行きたいです！」

クリーム色の髪を揺らして、深く頭を下げるミュゲ。そして、おねだりするかのような上目使いでシエーナを見つめた。

シエーナはしばらく一見天使ではない少女を見つめて、なにやら難しい表情を浮かべていた。

「いいわよう！ お姉さんに任せておきなさい〜！」
 そして何を思ってたか、ぼつと頬を赤くして、微笑みながら答える。

にやけている、と言えるかもしれない。

驚く薄葉達をよそに、ミュゲはばあつと笑顔を輝かせ、もう一度礼をした。

「ありがとう、シエーン！」

「いえいえ〜♪ その代わり〜♪」

やはり何かを要求するらしい。当然と言えば当然の流れ、ミュゲを除く全員が警戒を強める。

しかしその要求は、またも意外なものだった。

「お嬢ちゃん、こっちに乗らない〜？」

シエーンとミュゲを乗せたダチョウのような鳥に続いて、ベゲモートに乗る五人が続く。

そんなどう見ても怪しい集団を、国境警備の兵が見逃すはずもない。

「待て！ なんだお前達は」

シエーンの言う「すぐにでも通れる方法」とは何なのか——自然と彼女の顔に注目が集まる。

するとそこには、目を細め、今まで見たことのないような冷めた表情をするシエーンがいた。

「私はシエーン。王宮魔導士左門一席、そう言えば分かるかしら？」

間延びした先程までの口調とは違う引き締まった声に、薄葉達は開いた口が塞がらない。まるで別キャラのようなシエーンに、警備兵はびしつと背筋を伸ばして、敬礼した。

「……これはシエーン様！ 大変失礼いたしました！」

「結構。この子達は私の研究の協力者なのだけれど、通しても構わないわね？」

シエーンは警備の兵士達を細めた目で見下ろす。

背筋を正したまま、気合いの入った声で兵士も答えた。

「は！ もちろんであります！ 長期のお勤め、お疲れさまでした！」

「ご苦労さま。ほら、あなた達、行くわよ」

シエーンに敬礼する警備兵を横目に、一行は啞然としたまま後に続く。

しばらく進んでも、なおも敬礼し続ける兵士達の姿が後方に見えた。

奇妙な緊張感を覚えながら、薄葉達は沈黙に耐える。

やがて兵士達から見えないくらい離れたところで、またがるダチョウを止めたシエーンが、にっこり笑顔で振り返った。

「……と、まあ大体こんな感じですから……あんまり問題起こさないでくださいね……？ 私の責任になっちゃいますんで……」

一同の緊張がようやく解ける。

救世が、じと目でシェーナを睨んだ。

「……あなたがヴォラスのお偉方だとは分かりました。けど、それでズイスイの——他国の転覆を目論む組織に所属していたって、大問題ではないですか？」

シェーナは焦る様子もなく、再びへらへらとした笑顔で首を傾げた。

「あはは……ですね……。だからそれも黙っててくださいね……？ さすがにヴォラスとズイスイの間で血が流れるのは見たくないでしょ……？」

「……やっぱり私はお前が嫌いだ」

済がシェーナを睨み付け、ぼそりとつぶやく。

当然シェーナの活動は大問題だ。ズイスイ側に知られたら、国家間の火種にもなりかねない。しかし「天使達はそれを望まないだろう」と見越したうえで、シェーナは堂々と振る舞っているのだ。

その目算は、確かに救世達からすれば凶星である。しかし、いい気はしない。

「ま、冗談ですよ……♪ だいたい、バレるようなへマはしませんし……♪ それより、

せつかく一緒になったんですから……近場の街、ニフタまで同行しません……？ ちよこっとくらいならヴォラスの案内もしていいですよ……」

挑発的な雰囲気を一変させ、シェーナは明るく告げた。

「……皆さん、どうしましょう」

その救世の問いかけに一同が答える前に、シェーナは背中にしがみつくと少女にこう告げた。

「お姉さん、楽しい場所いっぱい知ってるけど、ミュゲちゃん行きたいかな……？」

「行きたい……！ シエーナ、お兄ちゃん助けてくれたから大好き……！」

シェーナと同じように語尾を伸ばして、ミュゲが笑う。

ただでさえ教育環境の悪いミュゲが、またよろしくないことを覚えてしまった。

ふざけた喋り方を真似するミュゲを見て、「さすが俺の妹可愛い」とでも言いたげにハランはうんうんと頷いている。

その様子を見た明華達は、きちんとミュゲにいろいろ教えなければ……と、保護者としての意識を芽生えさせていた。

ちなみにこの後、人懐っこいミュゲに一同が真つ先に教えたのは、「知らない人に付いていってはいけません」である。

何はともあれ、ヴォラスについてそこまで詳しくない一行としては、案内役が欲しいことは事実であった。

シエヌは回答を待つことなく、ヴォラスについてぐいぐいと語り始める。

「実はこのヴォラスでは〜四年置きにビッグイベントが催されるんですよ〜なんと今年はまさにその年！ だから国中お祭り騒ぎ〜！ 結構楽しめると思いますよ〜！」

『イベント』という単語を聞き、薄葉はふと、ズイスイで対立した不幸の天使、レイラのことを思い出した。激闘を繰り広げたあと、そのようなことを言っていた気がしたのだ。

「……ヴォラスでの、ビッグイベント？」

『ヴォラスカーニバル』。四年に一度の『チーム制闘技祭』ですよ〜。優勝チームには、超豪華賞品が与えられるイベントですよ〜。ああ、私もチームが揃えば出たいんですけどね〜。なにぶん天才故に妬みが酷くて、友達いないんですよ〜私〜』

シエヌの戯言を無視しつつ、薄葉は、はあ……と溜め息をつく。

「あの化け物女は……これに出ろって言ってたんか？」

彼女が去り際に残した言葉——『次に会った時は、もっと広い青空の下で、清々しく殺し合いましようね♪』。

薄葉は思った。

——絶対に参加せんぞ……！



不幸の天使レイラ

「くしゅんっ！」

「あれ？ レイラが風邪？ 珍しいね」

鼻をむずむずさせながら、黒髪の少女月島麗羅は、口元を押さえた。

「……きつとウスハが私の噂をしてるんだわ。ヴォラスカーニバルのことを知って、私が嫌いなウスハはこう言ったの。『参加したくねえ。あいつと会いたくないし』って。想いも届かず私、可哀想！ 不幸、不幸、不幸だわっ！」

「あはは……」

苦笑いする彼女の兄、月島流河。

伝承の天使であるレイラとルカは、この時ヤドハクの広場で騒動を起こしていた。正確には『レイラが』だったが。

レイラは広場の中央で気絶して山積みになった屈強な男達の一人をぐっと引き寄せ、物憂げな表情でその頭を撫でる。

「はあ……」

何を思っただけレイラは、男の頭髪を一本ずつ引き抜き始めた。

「好き、嫌い、好き、嫌い……」

ぶち、ぶち、ぶち、と痛々しい音が響く。その光景には花占いのような可憐さがまるでない。怖いだけだ。

「レ、レイラやめてあげて！ それはいけない！」

「……好き、嫌い、好き、嫌い」

聞く耳を持たないレイラの手を、ルカが掴んだ。すると珍しくレイラは抵抗しなかった。

「レイラ？」

「……不幸だわ。とつても不幸。もしも、カーニバルで殺しあつたら……ウスハは私に、可哀想って言ってくれるかな？」

「……？」

レイラのどこか寂しげな表情。ルカはそれに違和感を覚えた。

レイラは今までも、何度か恋をしたことがある。

しかし、それはフラれることが前提で、失恋の瞬間だけを求めている恋。最低な男に近づき、散々に振り回されてから捨てられる……そんな恋をレイラは愛していた。

「どうしてウスハ君に可哀想って思っただけなの？」

「……好きだから」

「だったら可哀想と思っただけでも、好きになつてもらわなくても、好きになつてもらえるように頑張ればいいんじゃないの？」

「……好きになつてもらう？」

レイラは不思議そうに首を傾げる。

「それで本当にウスハは振り向いてくれるの？」

どこかずれたレイラのそんな質問に、ルカは顔を曇らせた。

——そっか。レイラは……。

ルカはレイラの手を引き、立ち上がらせる。

「ヴォラスカーニバル、僕も参加するよ」

「え？ ルカ、前は参加しないって……」

「メンバーが集まらないんだらう？ だったら僕が力になるよ」

意外そうに目を見開くレイラ。

「一体どういう心変わり？ それに、それでもまだ二人足りないわよ？」

「大丈夫、僕は運がいいから」

ルカは優しく微笑んだ。

「ちゃつちゃと優勝商品を手に入れちゃおう」

ルカの言葉に、レイラは「ん？」と首を傾げた。

「優勝商品？」

「え？ レイラ、そっちは知らないの？」

今度はルカが驚いた表情を見せる。

「思い切り殺しあえる舞台だけじゃないの？ 何なの優勝賞品って？」

「いや、殺しは禁止されてるよ……優勝商品は——」

それを聞いたレイラは、嬉々として目を輝かせた。

*

かつて世界には幾つもの危機が訪れた。

その度に世界を救ってきたのは、伝説の天使兄妹。

大国ヴォラスにも、そんな黒髪天使達がいる。

三十年前、球界テッラを襲ったとある危機。

生物とは思えぬ異形、最強にして最悪と呼ばれた三体のテラスからなる一派『レマルゴス』。それらが大海から密かにエザフォス——アナトリ、ノトス、ズイスイ、ヴォラス各国からなる大陸へと侵入したのである。

レマルゴスの中でも、特に秀でた力と知性を持つルーナは、今までの粗暴なテラスとは違い、『レマルゴス』のみでヴォラスの王宮へと踏み入った。

「テッラの王様、ご機嫌麗しゅう。わたくし、球界プルトナスからの使者、ルーナと申します。あなた達がテラスと呼ぶ化け物の、リーダーに「ございます」

名だたる戦士を、魔導士を、楽々と薙ぎ倒してきたルーナ——宙に浮かぶ十字架に張り付けられた女は首だけ動かし、恭しく当時のヴォラス王に頭を下げた。

「今日は、テッラとプルトナスの平和的な統合について、お話し合いました」

そのふざけた提案を王は突っぱねようとしたが、ルーナはそれを制して話を続けた。

「わたくし共三人がこのエザフォスに攻め入れれば、テッラの民に尋常ではない被害が出るでしょう。多くの命が散りゆくことになる。もちろん、こちらもタダでは済まないと思い

ますが」

微笑むルーナを見て、王はその言葉が事実であることを理解した。それほどまでに、圧倒的な威圧感を放っている。

「そこで、ゲームをしませんか？」

ルーナが提案する。

「わたくし共『レマルゴス』と、そちらが用意した精銳とで勝負をしましょう。もしも、あなたが勝った場合、テラスはエザフォスから手を引きます。しかし、こちらが勝った場合は……この国をそっくりそのまま寄越していただきたいのです。国土、資源、人民……その全てを」

それは交渉とは名ばかりの脅迫であった。

「もちろん、お断りいただいても構いません。その場合は、数え切れない命が失われるでしょうが」

拒否すれば死——王にはそれが分かっていた。

ゲームをしたいという意図は掴みかねたが、王はルーナから、どこか焦っているような、後がないような、そんな印象を受けた。

「ハンデを差し上げましょう。こちらは三人ですが、あなた達は三十人まで精銳を出して

ください。十倍の人数、それならそちらが圧倒的に有利。そして、わたくし共三人を倒せるかもしれないのですから、かなりの好条件だと思いませんか？」

自信に満ち溢れたルーナの言葉には偽りも驕りもなかった。確かにこの機会に『レマルゴス』を討てれば、テラスとの戦いは一気に有利になる。

「……一カ月、猶予を差し上げます。それまでにわたくし共を倒せる精銳を用意してください。それまでは手出しいたしません。では一カ月後に、もう一度ここを訪れます。その時に、ゲームを始めましょう……」

そう言い残し、三体のテラスは姿を消した。

ヴォラス王はすぐに各国に事態を伝え、多くの人民には内密に、強力な戦力を集めることとなる。

その中に『伝承の天使』がいた。既にこの世界に馴染んでいた六人の天使達は、世界の危機を前に立ち上がった。

そして彼らは見事にルーナを打ち倒す。大きな犠牲を払いつつ、大きな過ちを犯しつ



杏樹明華

明華達天使一行が訪れた街ニフタには、お祭りムードが漂っていた。建物のあちこちに装飾が取り付けられ、出店が並び、その中に『ヴォラスカーニバル』の表記が見られる。こんな小さな街でもこの賑わいよう、イベントの大きさが容易に窺えた。

「ミュゲちゃん、ほらほら風船〜〜！」

「風船〜〜！」

奇妙な動物の形をした風船を買ってきたシェーナが、笑顔のミュゲに手渡す。ちなみにこれで十個目のプレゼントである。

「かわいい〜〜！ これも強くしよう〜〜！」

「強く？ いいね〜〜強くしようね〜〜！」

その様子を微妙な表情で眺める救世と済。

「……子供が好きなんですかね？」

「まあ……悪巧みしているようには見えないからいいだろう」

はしゃぐシェーナとミュゲを眺める救世に、明華が尋ねる。

「ところで救世さん。ヴォラスでもお仕事があるんですか？」

「ええ。でもヴォラスは意外と治療術士が揃っているそうなので、緊急な案件はないそうです。とりあえずどこから寄つてもいいんですが……一応、ここにもコミュニティはあるみたいですし、後で行つてみますよ」

「その時は私も一緒に行きます」

明華の言葉に救世はさりと答える。

「大丈夫ですよ。私一人でも仕事は片付けられますから、観光を楽しんだらどうですか？」

『伝承の天使』についても、私が手掛かりくらい探っておきますから」

「いえ、連れていってください！ ……えと、ヴォラスのことを調べる間もなく来てしまったので……情報収集もしておきたいですし！」

必死な様子の明華。救世にはその理由が分かっていた。しかし、別段それに触れずに微笑んだ。

「そうですね。じゃあ、一緒に行きましょう」

時間が必要なこともある——救世はそう考えていた。

「私も行くぞ、救世」

そこで、済が話に入ってきた。

「せっかくのお祭りなんですから、済ちゃんも楽しんでくればいいじゃないですか。別に私に気を遣わなくても……」

するとぷいっとそっぽを向いて、済は返す。

「いや、いい。祭りには別に興味ない」

強がりにしか見えない態度に、救世は苦笑いを浮かべた。

「枯れてますねえ、済ちゃん」

「か、枯れ……!?!」

「いえ、冗談ですよ。お付き合い感謝します」

救世は、済がかなり気を遣ってくれていることに気付いていた。

セルセラ・コミュニケーションの仕事をこなすだけでなく、天使に関する情報収集も積極的に行う救世の姿が、妹の目には無理をしていると映っていたのだろう。

「……じゃあ、早めに確認だけ済ませておきましょうか」

「あれ？ 救世さんどっか行くんですか？」

最後尾にいた薄葉が声を掛ける。

「あ、これからちよっとコミュニケーションのほうに顔を出してきます。ミュゲさんの邪魔をし

ちゃ悪いですから……薄葉さんはミュゲちゃんのこと、見ていてあげてくれませんか？」

「え？ え？ 済も明華も行くんですか？ ……まさか、こいつと二人きりで？」

薄葉は、凄^{すご}い形相で睨んでくるハランを横目で見た。

「俺、この人のこと良く知らないんですけど……何か初対面なのに、やたらと絡んでくるし……まだ互いに自己紹介すらしてないんですが」

「だあれが貴様なんぞに名乗るかッ!!」

「……俺、こいつ嫌です！」

本当に嫌そうな顔になる薄葉を宥めるように、救世は手のひらを前にかざす。

「まあまあ、仲良くしてください。薄葉さんが一緒なら、ミュゲさんも安心ですし」

「俺一人で十分だッ！ こんなロリコン野郎など必要ない！」

ハランが猛抗議する。

「じゃ、よろしくお願いますね？」

「おい！ 俺の話を開けッ！」

笑顔のままハランを無視して立ち去る救世。その姿をききぎと唸りながら見送ってから、薄葉とハランはじろりと視線を交わらせた。

「……なんなんだあの女は」

「救世さんは男だよ」

「お前は俺をバカにしているな？」

「本当だつづの！」

激しく火花を散らす二人の男——どうやら相性は最悪らしい。笑顔で手を振るミュゲ見たさに、ハランは薄葉から視線を離れた。

——こんな地味で冴えないロリコン男に、ミュゲは絶対に渡さんぞ……！
 そう心に誓いながら、シスコンお兄ちゃんは笑顔で妹に手を振り返すのだった。

「ワオ！ 明華ちゃん！ 無事で良かった〜♪ 心配したよ〜！ もう、ズイスイの支部で顔を出してくれないから心配してたよ〜♪ 具合はどお〜う？」

コミユニティのニフタ支部でも相変わらず待ち構えていた白面の窓口係は、入口を潜った三人組に、親しげに手を振った。それと同時に、奥のバーにいる人々の視線が一気に集まる。

「はい、大丈夫です」

「それは良かった♪ ごめんね〜。ズイスイでは想定外の事態で危ないことに巻き込まれて！」

まるで反省の色の見えない形だけの謝罪だったが、明華は気にする様子も見せない。

「いえ。コミユニティは何も関係のないことですから。私のミスです」

「そつかり〜。でも、薄葉つちとまた巡り会えてよかったねえ？」

意味深に口で「にやにや」と笑うジアミエンに対して、明華はぽつと頬を朱に染めた。するとジアミエンは「ん？」と首を傾げる。その珍しい反応に救世と済は驚いたが、すぐにいつもの不敵なジアミエンに戻っていた。

「うふふ」と意味深に笑い、ジアミエンは明華達に歩み寄る。

「と、ご挨拶もここまでにしてさあ。実は相談があるのよねえ？」

「それは特別治療術士としての依頼、ですか？」

救世が明華の前に出て、代表して尋ねた。

「うんにゃ、違う違う。でも、あなた達に対する『特別な依頼』ってところかしらん？」

『特別な依頼』という言葉に、バーにいる男達がびくりと反応した。

「……『ヴォラスカーニバル』。噂くらいはもう聞いてるんじゃないかって思うんだけど。実はとあるお客様から直々に、あなた達に参加依頼が来てるのよねん♪」

「参加……依頼？」

救世が反応すると同時に、バーの男達がざわめく。何やら不満げな様子だ。

ジアミエンは意に介した様子も見せずに、ひらりと一枚の紙を差し出した。それは『ヴォラスカーニバル』の参加案内。

救世が受け取った紙を、明華と済が覗き込むように目を通す。

「……参加者は四人一チームで、と書いてありますけど」

「そ。だからあなた達には、お客様の『不足人数分』である『三人』を埋めてもらいたいよん♪」

予想していなかった言葉に、きよんとした表情で救世が顔を上げた。

「三人？ ……それは今ここに居る三人で、ですか？」

すると「まさかあ」と首を横に振り、ジアミエンは両手でそれぞれ三本の指を立てた。

「『あなた達六人』を、三人ずつに分けて、ね？」

その言葉に、明華がびくりと身体を震わせた。

「お客様、二人いるのよん。そしてそれぞれが『男だけ』『女だけ』を要望してるのよねえ」

「『六人』って……それはミュゲちゃんも含んでるんですか？」

明華が明らかな不快感を示す。

「うふふ」と笑ったジアミエンは、ぼんぼんと明華の肩を叩いた。

「子供を戦わせたくない？ 大丈夫大丈夫。ちよつとしたスポーツみたいなものよ 殺

しは御法度、怪我のないようにきちつと安全が管理された環境、万が一に備えた治療術士の配備、普通にミュゲちゃんくらいの子供も参加申請してるわよん！」

ジアミエンはべらべらと、台本でも用意していたかのように流暢に喋る。それが逆に胡散くささを際立たせていた。

「依頼主はなんとヴォラス有数の貴族、ストラティゴス家の双子さんよん♪ お二人は次期当主の座を賭けて、このヴォラスカーニバルでの優勝を目指しているの！」

右手の親指と人差し指でちゃっかり丸を作りながら、ジアミエンは「ぐへへ」とゲスな笑いを口にした。

そこで救世が首を傾げる。

「それって……御家騒動というやつですか。両方に肩入れするって問題があるんじゃないや……？」

救世の唇にびつと指が当てられる。言葉を遮ったのはジアミエンの人差し指だった。

「そこは依頼者様にもご了承いただいでるわん♪ その上で、指名する三人を選んだみたいだし！」

救世は「なら大丈夫ですね」と頷きかけて、「ご了承いただいでる」という言葉に引つかかる。

「……まさか勝手に、もう受けてしまったんですか？」

「あはは〜♪」

ジアミンのとほけた笑いに、三人は大きな溜め息を漏らした。

「まあ？ 別に『コミュニティの宣伝になるー！』とか、『めっちゃ報酬もらえるぜい！』とか、けっしてそんな理由じゃないのよん♪……あなた達伝承の天使にとつて、ちょこつと美味しいお話もあるから快く受けたのよねえ」

『伝承の天使』という単語に、三人がわずかに反応する。それを見られて満足と言わんばかりに、ジアミンは「にやり」と口で笑った。

「実は依頼者に仕えてる側近は、一昔前の天使だった兄妹なのよね。さらには、このヴォラスを治める王マラークは……なんと最初の天使、勇者アゲロスの子孫なの」

ジアミンが「どや」とつぶやき「にやり」と笑う。

その思わぬ情報に、まさに開いた口が塞がらないといった表情を見せた明華達。

「彼らからなら、とつても有益な情報を得られると思わない？ もしもこの依頼を受けてくれたら、その兄妹にも会えるし、優勝すれば滅多にない王との謁見の機会も与えられる。さらにさらに、もう一つ、今回の依頼を受けてくれたら最高の『ご褒美』をあげるわ♪」
とんつとジアミンが指を置くのは救世の胸。そして「うふふ」と笑い声を漏らすと、

囁くように告げた。

「ズイスイでの大きな働きで、現在のコミュニティ内における救世つちの評価は相当高まっちゃつてるのよねん。今回の依頼はカーニバルへの『参加』だけが条件になっているけれど、もしも『優勝』した場合は特別に評価ポイントを上乗せして、さらに上位の報酬を与える……と上からのお達しよん♪ 最高級とは言わないけれど、それなりには権限も与えちゃうー！」

済が解せない、といった表情を見せた。救世がそいつた自己の利益にさして興味がないことは、ジアミンも知っているはずだからだ。

「私は別に報酬なんでものには——」

当然の回答。しかし、ジアミンの口からは思わぬ言葉が出た。

「知りたくない？ 『天使の伝承のページ』『天使の帰還について』の情報」

それを聞き、救世の表情が固まった。横で話に耳を傾けていた明華と済も、同様の反応を示す。

それを「くすくす」と楽しみながら、ジアミンは続ける。

「もちろん、三人ずつ男女に分かれて参加してもらうけど……どっちが優勝した場合でも、キッチリバッチリ全員を評価してあげる。だから、どっちが優勝しても、あなた達が求め

てる『元の世界に帰る方法』を教えるわ。今までの働きに応じて、格安で、ね♪」それは願ってもない条件であり、すぐにでも飛びつきたかった。

しかし救世は、言い知れぬ不安を抱いてしまう。人を疑うことを好まない救世でも、どうしても感じずにはいられない妙な違和感がそこにはあった。

しかし、ここで引く訳にもいかない。

「……とりあえず、全員の意見を聞きたいので、返答はお待ちいただけますか？」

一瞬の沈黙。

やがて、ジアミエンは「にっこり」と笑って両腕を広げた。

「ええもちろん♪ ヴォラスカーニバルの参加申請締切には、まだまだ時間があるからね！」

戯けた様子で「気にしてない」というアピールをするジアミエン。

そして一転、狙い澄ましたかのように、静かに、静かに、口調を重く沈ませて、広げた手をすっと下ろした。

「……いいお返事をお待ちしてるわ。あと、この付近で救世つちに頼むお仕事はないから、それでもお仕事したかったら掲示板を見ることね」

ジアミエンは笑い声を漏らさずに、受付の奥に消えていった。

コミュニケーションから出たところで、依頼に対して、明華と済は前向きの意を示す。

「ジアエミンさんに踊らされてる気がしないでもないですけど……それに乗るしか今は方法はなさそうですね」

「ああ。あいつはどうにも怪しいが……全てにおいて嘘をついているとは思えないな。依頼を受ければ、少なくとも一昔前の天使兄妹には会えるだろう」

明華と済は、勝手に納得してうんうんと頷く。

ズイスイでの一件から何だかんだの仲の良さそうな二人を見て、微笑ましく思ったり羨ましく思ったりと複雑な心境の救世。

と同時に、救世はやはりジアミエンに対して不安を覚えずにはいられなかった。

そんなネガティブな気を紛らわせようと、救世は周囲の露店に視線を移す。食べ物、記念品、アクセサリーなど、様々な店の並ぶ賑やかな通りは祭りが近付いていることを感じさせる。

救世がほっと一息ついた時、前方から聞き覚えのある声が響いた。

「うわああああああん！」

「ミュゲさん？」

たたたつと泣きながら駆けてくるミュゲと、その後ろに迫る女。

「はあっ！ はあっ！ ミュゲちゃ〜〜〜ん!!」

真つ先に駆け出したのは済だった。助走をつけ、はあはあ息を切らした必死な形相の女、シエーナを迎え撃つ!

「この変態があッ!!」

ガッ!

「ひでぶっ!」

すれ違いざまのラリアットを食らい、空中で一回転して地面に倒れるシエーナ。

「このロリコン犯罪者めッ!」

「ち、違っ! わ、私はミュゲちゃんを心配して追いかけて来ただけです!」

キャラ作りを忘れた口調で否定していることから、どうやら嘘ではないようだ。

一方のミュゲは、明華に抱きつきながらえんえんと泣く。

「ウスハとお兄ちゃんが……!」

すると、せいぜいと肩で息をするシエーナが、キャラ作りを思い出したように、無理矢理へらつと笑って喋り始めた。

「あ、そうそう! 大変です〜〜! あの冴えない男二人が、殴り合いの喧嘩を始めたん

です〜〜〜!」

突然の物騒ものさわな話はなしに、済は驚きを隠せない。

「何!? 何をやってるんだあいつらは!」

シエーナが不満げにぼそりとつぶやいた。

「……あの、謝ってもらえませんか〜? 私、なんでロリコン犯罪者扱いされたんですか〜?」

面倒くさそうに済は答える。

「……いや、はあはあ言いながら走ってきたから」

「走って息を切らしてただけですよ〜! まあ、多少興奮はしてましたが……ひでぶっ!」

足できつちりと犯罪者にトドメを刺してから、済は薄葉達がいるはずの場所に向かった。

「ったく、あいつらめ……!」

続いて、救世がミュゲを慰なぐさめている明華の肩を叩く。

「私達も行きましょう!」

「え、あ、はい!」

賑やかな街並みを駆け抜けた済達の目に、ざわめく人集ひしだがりが飛び込んできた。

そこに待ち受けていたのは、ボコボコにされて地面に沈むハランと、無傷で気まずそうにしている薄葉だった。

「殴り合いの喧嘩はやめろ！ ハラン！ 薄葉！」

「どう見ても俺だけがやられてるだろうが！」

地面からよろつと起き上がると、ハランが吠える。

確かに「殴り合い」と言うには、一方的な結果に見えた。

圧勝したらしい薄葉はというと、何が起こったのかさっぱり分からない、といった様子である。

「いや、何か知らんがこいつが勝手に倒れてた」

「あれだけ殴っておいて、さりと嘘をつくな！」

ハランが顔を真っ赤にしながら薄葉に叫ぶ。

そこに事件の目撃者が、顔に靴の跡を残しながらよたよたとやってきた。

「最初に手を出そうとしたのは、そっちの中二病の方ですよ。そしたら攻撃を当てる間もなく返り討ちにされてました」

状況をようやく理解した済は、呆れ顔でハランに問う。

「ハラン、お前何をした？ 薄葉は何かされなきややり返さないぞ」

見抜かれたと察したのか、ハランは悔しげに歯がみする。

「くっ……！ だって、こいつがミュゲとイチヤイチャと！」

「してねーよ！」

恐らくはハランの思い込みなのだろう。しかし、ハランはそう簡単に納得しない。

「なにおう!? おのれ、きさ……ギユウツ！」

立ち上がり吠えようとしたハランの頬に薄葉がピンタをぶちかます。

薄葉は敵意に反応して、無意識のうちに反撃する特性を持っているのだ！

ビターンツと地面に再び倒れるハラン。

しかし、それでもまだ食い下がろうとするハランにトドメを刺したのは……。

「ケンカはやだ！ お兄ちゃんもウスハも大嫌い！」

いつの間にか泣き止んだミュゲが、今度は怒って怒鳴りつけた。

ハランは9999ダメージを受けた！ ハランは倒れた！

「え、えええ？ 俺、暴力とか……振るってた？」

一方の薄葉は戸惑い気味に頭を掻いて、しゅんとしている。ロリコンじゃないと言いつつも、好かれていた少女から突然嫌いと言われ、ショックを受けたのだ。

その様子をむむむと唸りながら見ていた済は、はっと名案を思いついた。不敵な笑みを

立ち読みサンプル
はここまで

浮かべて、珍しく抜群ばっぐんのフォローをする。

「ミュゲはあの二人が嫌いか。そうか……じゃあ、全員少し頭を冷やす必要があるなあ」
 済はちらりと後ろの明華に目をやった。

「実は、コミユニティとある依頼の話をもらってきたんだが………」

こうして、男女が別々のチームで戦うという話に、誰も反対できなかったのである。

「いやあ……まさかこんなに早く返事をもらえるとは思わなかったわ……！」

ジアミンは嬉々として、コミユニティにやってきた六人を迎え入れる。

「……でも、何だか変な空気が流れているのは気のせいかな？」

「ああ、気にするな。じきに良くなる」

放心状態のハラン、寂しげな表情の薄葉、そして明華の手を握るいじけ気味のミュゲ。明らかに気まずそうな雰囲気でも、空気を読まないジアミンには関係ない。

「ならいいけどね！ いやあ、良かった……」 実は依頼主の使いの人が、あなた達がヴォラスに到着したと聞きつけて、さっそくこのニフタまで迎えに来てるんだよねえ…… 喜べ貧民共！ なんと馬車でのお迎えであるぞ……！」

ジアミンの「けらけら」という笑い声と共に、コミユニティ奥のバーにいた異質な男